# 世田谷村日記

石山修武

七月十六日

十四日は藤森照信学会作品賞の祝賀会だった。司会役をおおせつかった。祝辞は磯崎新丸谷才一赤瀬川原平鈴木博之、安藤忠男細川元首相。会場は三井開東閣。落ち着いた良い会だった。

二次会は東京飯店を磯崎さんにとってもらい、十名程で、路上観察学会グループと建築家グループが丁度半々で、源平合戦の趣きあり。これで友人達の各種受賞は一段落した。

七月十八日

世田谷村の工事もだいぶ進んで、ようやく先が見えてきた。スタッフ、院生の作業でいわゆる仕上げ工事をすすめた。

二〇代にネジ式と呼んで直観的に始めた事が今に続いている。長野愛知県境に作った治部坂キャビン、渥美二連ドーム、卵形ドームそして菅平の開拓者の家。著作としては「バラック浄土」「秋葉原感覚で住宅を考える」で考えていた事がようやくある程度の形になって出来上った。

今になって理解できるのだが、この建築（のようなモノ）の一番大切なことは未完成であり続けることだ。私もそれを望んでいるし、家族同居人達の最近の言動を見ていると、どうやらそうならざるを得ないだろう。

暮してゆくこと、生きてゆくことは常に身のまわりに空間を作ってゆくことだ。その空間は今の様な時代では情報空間として把握されたり、昔は視覚的な空間としてだけ考えられてきた。眼に見える空間ばかりが空間の全てではないことの認識は最近のことだ。

先日鈴木博之と話していたら彼が面白いことを言っていた。

「ケイタイで話している人間はそこに居るようでいて居ない。だから都市のいたるところにプカプカと穴が開いていて、その穴が閉じたり開いたりしている。つまり点滅している。それが今の都市空間であって、我々がそこに在ると思っている空間の実体は実はボコボコに穴が開いているのだ。」

なるほどそうなんだ。

空間は侵蝕されている。

居ながらにして居ない。実体が実体でなくなる。神戸の酒鬼バラ少年言うところの透明な存在としての僕、はすでに日常的に漫延していると言はねばならない。

世田谷村で試みているのは、部分の作り方を変えることで、全体をゆるやかに解放してゆこうとする試みだ。私という主体によって細部という細部が知り抜かれている。そのことで何が変るか、あるいは変った関係が出現するのかの実験である。知り抜かれている細部の集積としての全体が在る。

身の廻りの空間をできるだけ自分の手でつくろうとする事は、すなわち知覚できるテリトリーをできるだけ拡張してゆこうとする事だ。わたしの身の廻りの空間はわからないモノの巨大な集合である。都市も住居も総体としては迷宮になっている。その迷宮を迷宮にしたままではいけない。先ずは一番身近である筈の住居から、わかる状態の空間へと作り直してゆく必要があるだろう。